

しなのへまかりける人に、たきものつかはすとて、
するが

しなのなるあさまの山もみゆなればふじのけむりのかひやなからん略○中

いせへまかりける人、とくいなんと心もとながるとき、て、たびのてうどなど、とらするも

のから、たゝんかみにかきてとらす、なをばむまといひけるに、よみ人しらす

おしと思心はなくてこのたびはゆくむまにむちをおほせつる哉略○中

とをき國にまかりける人に、たびのぐつかはしける、かゞみのはこのうらにかきつけてつ

かはしける、
おほくぼののりよし

身をわくる事のかたさにもす鏡影ばかりをぞ君にそへつる略○中

みちのくにへまかりける人に、あふぎてうじて、うたゑにか、せ侍ける、

よみ人しらす

別行道の雲居になりゆけばとまる心も空にこそなれ略○中

秋たびにまかりける人に、ぬさをもみちの枝につけてつかはしける、

よみ人しらす

秋ふかくたび行人の手向にはもみちにまさるぬさはなかりけり

〔後拾遺和歌集八〕の中へまかりける人に、かりぎぬあふぎつかはすとて、
藤原長能

よのつねにおもふわかれのたびならば心見えなるたむけせましや

〔榮花物語十二玉村菊〕かくて帥中納言隆家原祭の又の日長和三年四月くんだり給べければ、さるべきとこ

ろどころより、御馬のはなむけどもあるなかに、中宮藤原三條后より御心よせ思ひきこえ給へり

ければ、装束せさせ給て御扇に、

すゞしさはいきの松ばらまさるともそふるあふぎの風なわすれそ、かくて我はかちより、き